

## Docteur de 3<sup>e</sup> cycle 小林道夫氏の『デカルトの自然哲学』に対する授賞審査要旨

### トの自然哲学』に対する授賞審査要旨

本書（一九九六年九月、B5版全二二六頁）は、小林道夫氏（以下、氏と略す）が一九九一年にコレージュ・ド・フランスにおいてなした八回の連続講演に、端を発する。その講演は、氏によって多少の改訂がなされて、“Michio KOBAYASHI: La philosophie naturelle de Descartes, Vrin Paris 1993”として出版された。それを氏が更に添削し、邦文に書き直したのが本書である。

本書の標題である『デカルトの自然哲学』とは、デカルトにおける自然学とその基礎である形而上学とを意味する。その標題は、デカルトの哲学的発展の主要な段階をも考慮に容れて、次の如くに分節される。すなわち、I 『規則論』の過渡的思想。II 永遠真理創造説 (la thèse de la création des vérités éternelles) —— デカルトの自然哲学の形而上学的基礎 ——。III 自然学の基礎づけとしての『省察』。IV デカルトの自然学と古典力学の形成。V デカルト自然学の限界と問題。VI デカルトの自然学の批判的改編 —— ホイヘンス、ニュートン、オイラーの場合 ——。結び デカルト自然学の

価値と射程。以下直ちに結論的評価に入る。

本書には七つの長所と二つの欠点と一つの問題点とが挙げられねばならない。

本書の長所は、次のように列挙される。すなわち、

一、本書の内にはないが、氏は時折「考証的」とか「考証学的」という語を以て、氏自身の研究の仕方を特色づけている。この語は、「我流のインスピレーションに基づく」所謂「独自の解釈」等を排除して、テキスト及び文献を資料にして事実を実証的に解明する学風を意味している。その点から見れば、本書において氏がデカルトの著作や書簡から断簡零墨に到るまで精通しており、それらを自由に駆使していることは、一目瞭然である。更に氏は、デカルト研究に関する第二次的文献（主としてフランス語の文献）の批判的検討をも忽せにしていない。

二、本書は、デカルトの形而上学よりは、従来研究されることの少なかった自然学の方に重点を置いている。形而上学はデカルトにおいては、自然学の基礎論であって、自然学の基礎論ではない、否寧ろデカルトにおいては両者は、氏の言う如く「自然哲学」として相互に浸透し合う関係の内にあつたと思われる。その意味において本書『デカルトの自然哲学』は、日本のみならず、デカルトの本国であるフランスにおいても、デカルト研究に新たな一つの方面を

開いた著作である。

三、本書は極めて首尾一貫した著作である。「普遍数学」より始めて「永遠真理創造説」を究極の根柢として「物質従つてまた物体と延長との同一化のテーゼ」を経て「宇宙論的自然学」に到る筋道は、最初の「普遍数学」の——解析幾何学に止まらざる——具體的展開にして変化とも見做され得るであらう。

四、本書はそのような筋道を、幾つかの「順序」と各々の順序内に更に細かな「段階」とを画しつゝ極めて緊密に展開する。これこそ、近世においてデカルトから本格的に始まった厳密な意味での体系的思惟である。その故に、氏の他の著作より、比較的に小さい本書を採り上げたのである。

五、本書は、「我思う…我有り」(Cogito…sum)という主観的思惟と存在とのレヴェルに止まらず、そのレヴェルから「神の存在」と「外物の存在」とへの移行を「越え出で」として、氏の別の著作中の表現に従えば「超出乃至転回」として明確に性格づける。「超出乃至転回」というこの性格づけを、その後のカントやヘーゲルの哲学をも考慮して、最も高く評価する。

六、デカルトの「宇宙論的自然学」のその後における変容と排除とを、ホイヘンス、ニュートン、オイラーの自然観を通して、明確に示したことも、本書の功績の一つである。

七、デカルト自然学の機械技術的性格を指摘したことも、本書の長所の一つである。しかし、それが指摘に止まり、展開されてないことは、残念である。

しかし、その反面において本書にも欠点が二つある。すなわち、一、アリストテレスの自然学を「経験論」とか「経験主義」として特色づけることは、プラトンのイデア論やデカルトの合理論と對比した限りでは、有意味かも知れず、またアリストテレスのテクストのある箇所に基づいているとはいへ、所詮アリストテレスの自然学の一面を強調しているに過ぎず、到底彼の自然学の全面的性格には該当しない。

二、「マツハ原理」を、デカルトの宇宙論的自然学の「復活」と解するのは、事態の表面の類似性に捉えられた見解であり、賛成できない。自然認識を可能にする根底においてマツハとデカルトとは非常に相違するからである。

本書の問題点とはすなわち、

一、本書において「中枢的テーゼ」と言われている「永遠真理創造説」の含む問題点である。このテーゼは、長い忘却の内から、氏が師事したジュヌヴィエヴ・ロディス・レヴィイス教授によつて一九七〇年頃に再発見されたと、言われている。しかし、二〇世紀前半の哲学において碩学の一人であつたエルンスト・カッシーラーは、

その初期の大著『近世の哲学と科学とにおける認識問題』の内でデカルトに関する箇所で、このテーゼに明確に言及しており、しかも「この（テーゼの）帰結において…デカルトは、彼の認識論のみならず、彼の形而上学さえをも、根こそぎにしまった<sup>注(1)</sup>」と否定的見解を述べている。それに反して、現代のドイツ語圏でデカルト哲学の著名な研究者の一人であるインスブルック大学のヴォルフガング・レート教授は、その改作された著作『デカルト デカルトの合理主義の生成』の内で、「（永遠真理創造説という）この仮定なしには、神の全能という無限性は主張され得なくなるであろう<sup>注(2)</sup>」と書いて肯定的見解を示している。氏は、この両方の見解をフランス語の研究文献を通して承知しているが、肯定的見解に与している。しかし、この問題点はデカルト哲学の中枢的テーゼに関する事柄である故、デカルトがそう書いているからと言って、肯定的見解を採ることはできない。しかも中枢的テーゼに関する故に、そのテーゼを肯定するか否かというその問題点は、最早如何なる根拠づけをも許さない。真に底なしの難問である。この難問は、氏に更なる努力と思索とを要求するであろう。

注 (一) "In dieser Folgerung aber, ... hat Descartes nicht nur seine Erkenntnislehre sondern selbst seine Metaphysik ent wurzelt." Ernst Cassirer: Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und

Wissenschaft der neueren Zeit, Erster Band I Aufl 1906, II Aufl 1910, jetzt Gesammelte Werke Bd. 2, S.413-414, Hamburg 1999.  
注 (二) Wolfgang Röd: Descartes Die Genese des cartesianischen Rationalismus, II völlig überarbeitete und erweiterte Aufl. S.111, München 1982.